



平成 19 年 5 月 24 日、第 3 回阪大フォーラムが、京都府立医科大学の感染対策部部長藤田直久先生（写真 1）をおむかえして開催されました。林紀夫病院長、川瀬一郎副病院長、福澤正洋副病院長をはじめ、224 名のたくさんの病院職員（医師 21 名、看護師 147 名、その他医療系 40 名、事務職員 16 名）の方が参加されました（写真 2）。



（写真 1）



（写真 2）

今回のテーマは「教えて隣の感染制御 パート 2 イケテル病院になるための感染対策」でした。

最初に藤田先生は、イケテル病院になるために必要な院内感染対策とは図 1 に示すような条件を満たすことであり、「イケテル病院」のゴールとは図 2 のようにまとめられると話されました。

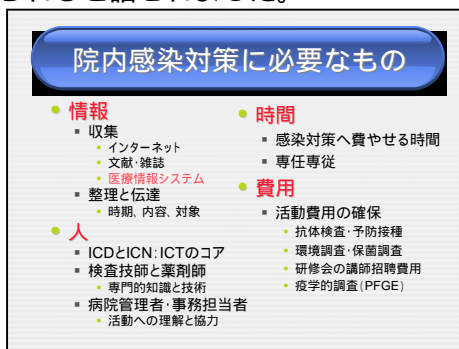


図 1. 院内感染対策に必要なもの

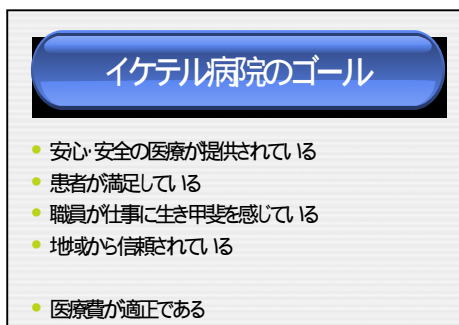


図 2. イケテル病院のゴール

次に、藤田先生は京都府立医科大学の実際の取り組みについてお話をされました。その中でも、「AMT (Antimicrobial Management Team; 抗菌薬適正使用推進チーム) の活動」と、「365 日オープン感染症検査」のふたつの実践について詳しく解説されました。

AMT は、図 3 のような目的と構成員で 1 回 2 時間、週 2 回のラウンドを行なっているそうです。



図 3. ATM の目的と活動

カルバペネム系や第 4 世代セファロスポリン系、フルオロキノロン系などの広域抗菌薬と抗 MRSA 薬は、使用の届出もしくは許可が必要な薬剤であり、その使用状況に関する情報が病院のサーバーや ICD の臨床診断評価などとともにデータベースに集積され、それをもとにラウンドがおこなわれています。そして、抗菌薬が適切に使用されるように、不必要な使用に対してはカルテに中止や変更についての助言を記載するとのことです。ユニークな点は、薬価についても具体的に提示するようで、これはかなり効果があるとのことです。阪大病院でも抗菌薬の適正使用の推進は感染制御部の活動のひとつの重要なテーマです。

感染症検査の 365 日オープン体制は、2005 年度からスタートしたようで、これによって検体の提出から培養結果の報告までの時間が短縮され、臨床に貢献しているとのことでした。特に MRSA による菌血症、敗血症の治療成績の向上に寄与した可能性のあることを示されました。

藤田先生は、京都府立医科大学の検査部と感染対策部の両方の部長を併任されており、検査部と一体型の感染対策を実践されています。しかし、これからは、感染制御の活動には、専任の医師、看護師が中心となって活動することが必要であると結論されました。

藤田先生の講演をお聞きし、阪大病院の感染制御部の活動に有益な情報を得ることができ、今後即座にあるいは時間をかけて学ぶべき点が多くあることを認識いたしました。昨年の兵庫医科大学病院に続き今回は京都府立医科大学病院の感染制御活動をシリーズでご講演いただきました。また次の機会にも、近隣の病院のユニークで有益な感染対策をお聞きする機会を設けたいと思います。ご期待ください。